

次の文章は、「リアルであること」と題された文章である。著者の言う、イデオロギーや夢、宗教、死、科学などと「リアル」との関係を検討し、あなたの考えを自由に述べなさい。

ベルリンの壁が崩壊したとき、ぼくたちはテレビの映像にくぎづけになった。そのときは、テレビのあの平面的で、表面的な画像が、まったく時代にふさわしいものに見えたものだ。いままでごまかしたり、隠したりされてきた、多くの情報が公開されるようになった。あのとき世界は、深さのないテレビ映像とともに、すこしだけ「客観」にむかつて、前進したように思えたのである。

不思議なことに、ぼくはあのとき以来、あんなに好きだった映画にたいする興味を、急速に失った。幻想に幻想を重ね、夢に夢を重ね、意味に意味の厚みをふやしていくようにしてつくられている、すべての表現に、げっそりしはじめたのだ。

現実とのあいだに、たくさんのお金をかけて、新しい魅力的なペールをつくりだすことよりも、すがすがしい朝の空気のような、薄い透明な層だけをとおして、リアルに触れていたい。そのリアルを厚ぼったい物語にかえる、政治の神話も必要はないし、スピルバーグ的な映像の、偽善っぽい虚構も、うっとおしいばかりだ。

夢やヴァーチャル・リアリティのなかで、生命を消費していくよりも、自分の生命を、リアルな実在として、生きはじめてみたい。ときには、自分のなかでうごめいている、いつさいの夢の進行をストップさせて、そのときに現れてくる世界の裸のからだに、素手で触れて、それをなでたり、さすったりしてみたい。それが、あのベルリンの壁の崩壊や、ソ連の解体とともにじまった、九〇年代の精神ではないのだろうか。

ところが、あれから数年がたつてみると、ぼくたちをとりかこんでいる世界には、あいかわらずリアルは、立ちあらわれてこないし、いたるところに、ますます厚い観念のペールが、はりめぐらされるようになってきている。

に気がつく。たしかに、イデオロギーは消えた。しかし、それが消えた分、今度はぼくたちの意識を、リアルに直接接触させまいとする、別のメカニズムが作動しだしているのだ。

かつて、イデオロギーが機能していたときには、そのイデオロギーをとおして、いまある世界の限界をつき破って、人間に未知の可能性を開こう、というメッセージが語られていた。人間は快感原則の生き物だから、いまある世界が、快適で、過ごしやすくつくられていれば、そのなかでけっこう幸せなまま、人生を送ることもできる。しかし、イデオロギーが発していたメッセージは、そういう現世への埋没を、否定しながら生きていくようにと、語っていたのである。

八〇年代とは、そういうイデオロギーのおこなう、現実否定のよびかけに、耳に蠟をつめて、遠ざかっていたころとする時代だった。これには、二重の意味があった。ひとつには、いまある人生を犠牲にして、その意味を未来に先送りしていくこうとするような、イデオロギー的な生き方をやめたい、という願望がそこにあらわれていたのである。自分たちのいまある生命を、生命そのものとは別の、意味とか夢とかのためにではなく、それをリアルとして生きてみたい、という願望だ。

ところが、そこからは、もうひとつの意味が派生してしまった。イデオロギーには、すくなくとも、いまある世界のあり方を否定して、そこに見えないもの、未知のものを出現させようとする、よびかけがこめられていた。八〇年代は、イデオロギーの幻想機能といつしよに、それがもっていた、現実をおおうペールのむこう側に出ていくこうとする、実存へのよびかけまで、たらいの水もろとも、流しきってしまったのだ。

そのために、日本人のなかには、自分をとりまいている、いまある世界とは、別のところに出ていきたいという願望だけが、自分を受け止めてくれるものがないままに、宙をさまよう状況が、生まれてしまった。それをと

りあえず受け止めてくれたのが、さまざまなかたちの宗教だった。

宗教は、若者に「出家」をよびかけた。いまある世界から、別のところへ出てこい、とよびかけた。また別の宗教は、マスコミや教育がつくる、社会の通念などは、みんな根拠のない虚構なのだ、だから、それをすてて、真実の人間の共同体に入っていってほしい、とよびかけた。たくさん若者が、それにひかれた。彼らの多くは、それがかつて親たちの世代をとらえていた、イデオロギーの代用物だとは知らないで、宗教的な共同体のなかには、新しい別の世界があるのだ、と思い込もうとした。

しかし、たいていの宗教は、いまある世界を出て、別の精神的な共同体のなかに入っておいで、と語るのだけれど、その共同体が、けっきょくはもうひとつの夢、もうひとつの虚構としてつくられてしまう、という矛盾をのりこえることができないのだ。リアルを見るために、生まれ育った世界を出たものの、リアルに近づくどころか、別の幻想が、彼らを待っている。

そして、いったんそこに入ってしまうと、なかなかそこから出てくるのが、むずかしい。以前だったら、どこか別のところへ行けば、救いがあるかも知れない、と思うこともできた。しかし、ひとつの夢から別の夢に、たらいまわしされた体験をもつと、人間はなかなか、それ以上の冒険ができなくなってしまうからだ。

だから、九〇年代は宗教の時代であるとか、宗教がこれからはじまる新しい時代の鍵となる、といった考えは、まるで無責任な話なのである。それは、いつときの代用品でしかない。それに、若者もふくめて、みんなそのことには、うすうす感づきはじめている。ほんとうに求めているのは、これじゃないんだって。

人間がいまほんとうに求めているものは、自分の生命とのリアルな接触ということだ、とぼくは思う。いまのところ宗教は、科学よりも、それに答える能力の点ではまさっているところもある。しかし、それにほんとうの

意味で答えることのできる宗教というのはいま人々をひきつけている自分の魅力のほとんどを、みずから否定することができ、自分が宗教であることを、のりこえることができたものだけだ。

残念ながら、そういうものはまだ生まれていない。もちろん、生まれるきざしはある。人々のあいだに生まれている、「死」にたいする深い関心に、そのことがよくあらわれている。「死」こそが、絶対のリアルだからだ。ぼくたちは、死ぬことによつて、かならずそれに触れる。そして、昔から、人間は「死」というその絶対のリアルをとおして、生きていることの意味を、考えることができた。

ところが、無思想につきうごかされたまま、無明の発達をとげている、いまの技術主義の医学や、死のリアルとの接触をおそれる、臆病なブルジョア精神の蔓延によつて、ぼくたちはそれから、できるだけ遠ざけられている。現代の世界には、分厚い「底」のようなものがあつて、それがリアルの侵入をふせいでいる。

イデオロギーは消えたけれども、こんどは世界は総力をつくして、そのじょうぶな「底」を維持しつづけ、巨大な夢の自己回転を、つづけていこうとするようになった。いやむしろ、ヴィジョンをなくして、保守的になつた分だけ、人間をリアルからへだてる、その「底」は分厚いものになりつつあるのではないか。

人間に、自分の生命のリアルとの触れ合いを可能にしていく、別のやり方を、ぼくは創造したいと願っている。ぼくは、いつさいの幻想を、人間の意識からぬぐいさつてしまいたいのかも知れない。世界の裸体は、ほんとうに美しい。その裸体を自分が所有したいとか、思いどおりにしたいとか、思ったとたんに、裸の美女は消えてしまう。ぼくたちは、リアルとの、真実の性交を求めているのだ。

〔出典〕中沢新一『リアルであること』

（メタログ、一九九四年）